

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

〈基調講演〉

国際生命情報科学会誌 20巻2号p.303参照

21世紀は統合医療になる

渥美 和彦

日本代替・相補・伝統医療連合会議 理事長（日本、東京）

要旨：20世紀の科学の時代は終わり、21世紀の人類が共存する時代に入りました。今、東西医療の障壁を乗り越えて新しい統合医療の道を歩む必要があります。この目標を達成するためには、今後も西洋医学が中核的存在としてその実践を展開するだけでなく、代替・相補・伝統医療との融合的・発展的な協調による全人的な医療システムを築き上げる必要があります。

演者紹介：昭和29年、東京大学医学部卒。昭和39年、同大学医学部医用電子研究施設教授。平成元年5月東京大学名誉教授。平成2年、日本工学院専門学校校長に就任。平成6年、第16期日本学術会議会員第七部長。平成7年、鈴鹿医療科学大学学長。平成10年、日本代替・相補・伝統医療連合会議理事長。研究分野は、人工臓器、医用高分子、医療情報システム、医用サーモグラフィー、レーザー医学、超音波ホログラフィー、生体磁気、医学のコンピュータ応用、未来学等。主な受賞：昭和41年朝日学術奨励賞（朝日新聞社）、昭和57年アメリカレーザ医学会賞（アメリカレーザ医学会）、昭和63年バイオマテリアル科学功績賞（日本バイオマテリアル学会）、他多数

渥美和彦 東京大学 名誉教授
〒113-0023 東京都文京区向丘1-6-2
Phone：03-3812-4482, Fax：03-3812-4982
E-mail：k-atsumi@aurora.dti.ne.jp

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

〈基調講演〉

国際生命情報科学会誌 20巻2号 pp.304-309 参照

代替相補療法とイチローの打撃

帯津 良一

帯津三敬病院 名誉院長（日本、埼玉）

要旨：代替療法はそのほとんどが Body にはたらきかける方法ではなく、Mind と Spirit、すなわち生命場にはたらきかける方法である。生命場のエネルギー状態は限りない連続を示し、Body のように正常か異常かの二極化は不可能で、これを御するのはアントノフスキーの健康生成論である。したがって、代替療法とは無限の可能性を秘めながら、一步一步地道に前進するための方法である。このことをホームランの可能性を秘めながら、常にはシングルヒットをねらっていくイチローのバッティングを借りて示してみた。

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

〈基調講演〉

国際生命情報科学会誌 20巻2号 pp317-342 参照

外気功には暗示以外の何かがあるか

山本 幹男¹、

小久保 秀之¹、原口 鈴恵¹、古角 智子¹、田中 昌孝¹、張 トウ¹、
陳 偉中¹、小竹 潤一郎¹、世一 秀雄¹、河野 貴美子^{2,1}、福田 信男¹

¹山本生体放射研究室、放医研 (NIRS)、千葉、日本

²情報科学センター、日本医科大学、東京、日本

要旨：外気功とは、気功師や武道家が非接触で自分の体の外の他人、生物や物体に影響を与えている現象を指す。非接触でも、他人の体を揺らしたり病気を治したりできるとも言われている。非接触の外気功に関し、暗示効果以外の何かがあるのか無いのかを検証する厳密な科学的実験法を模索し試みている。

本報ではその一部として、二重盲検試験、無作為（ランダム）化、統計解析の手法で、離れた別室に居る相手を動かす「遠当て」の実験、気功師の手からの送気の一般情報遮断状態での感知実験、気功師による培養細胞の増殖能力回復実験について報告する。

本研究は科学技術振興費「多様同時計測による生体機能解析法の研究」（1995年度から5年間）の一部として行われ、その後、一新パラダイム創成に向けて一試行的研究プログラム「多様計測による特殊生体機に関する研究」（2000年度から）の一部として継続されている。

山本幹男 博士(工学)、博士(医学)

放射線医学総合研究所 重粒子医科学センター 山本生体放射研究室 代表

Phone : 043-206-3066 Fax : 043-206-3069

E-mail : yamamo@nirs.go.jp [http : //wwwsoc.nii.ac.jp/islis/belabo.htm](http://wwwsoc.nii.ac.jp/islis/belabo.htm)

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

〈基調講演〉

国際生命情報科学会誌 20巻2号pp.343-344参照

21世紀のニューパラダイム

佐古 曜一郎

国際生命情報科学会 理事（日本、千葉）

要旨: 21世紀は現状のパラダイムのままでは立ちゆかないと思われる。20世紀は効率最優先の、物質的な欲求を追い求める時代であった。21世紀はそんな時代と決別し、「心」を最優先とする、精神的な充足に寄与する科学技術を構築すべきである。その中心的な研究テーマが、再現性や客観性だけでは捉えきれない「心、精神、霊性、意識」に関わる研究である。本講演では、特異的な現象や人間の潜在能力に関わるいくつかの実験データを紹介し、21世紀の科学技術の進むべき方向性を考える。

概要

われわれは今21世紀にいる。

20世紀は物理学を中心とする科学技術の急速な進歩による物質文明の発展の世紀であった。大量生産を背景とした工業製品の奔流の時代は、物的資源をいかに囲い込むかという国家と企業の攻防の歴史でもあった。攻防の中で得られた生活の豊かさは大きかったものの、その物質的な充足は、必ずしも精神的充足に結びつかなかった。

21世紀は有限な物的資源ではなく、無限の心的資源に目をむける時代でなければならない。科学技術も「人間はどこから来て、どこへいく

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

のか？何のために、どう生きるのか？」という根源的な問題まで、深く考える哲学を持つ必要がある。

われわれはこの21世紀に、物質的な時代を精神的な時代に導くという、重大な使命を持っている。その歴史的な転換をできるだけ早く高らかに宣言すべきである。できれば、このHuman Psi Forumにて。

中でも「心、精神、霊性、意識」に関わる研究は、重要な役目を担う。この研究は「心身二元論」「要素還元主義」では解明できない、心と身体との相互作用などの複雑な現象に取り組まなければならない。さらに人間という小宇宙と、広大な大宇宙を包含する未解明の壮大な情報系に踏み込むことが要求される。それはまさに大自然を含めた生命の本質を問い直す試みである。

本講演では、特異的な現象や人間の潜在能力に関わるいくつかの実験データを取り上げ、報告する。特に場の雰囲気も含めた実験条件の変化による実験結果への影響の評価内容を報告し、21世紀のニューパラダイムはどうあるべきかの問題提起とする。

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

〈基調講演〉

国際生命情報科学会誌 20巻2号 pp.345-372 参照

特異効能の生理分析 (透視と薬のビン抜けと分析)

町 好雄、劉 超、王 強、王 斌

東京電機大学大学院工学研究科(日本、東京)

要旨：透視実験を行い、各種の生理測定を行い、透視という現象がどのような状態であるかを測定した。その結果、交感神経系を活発にしておいて、瞬間に副交感神経系を強めていることがわかった。この時には、首と額における血流が増加していることが分かった。さらに血圧の増加も見られ、血中酸素濃度が減少することも分かった。このような能力を発揮する時には GSR のデータ中に振動現象が見つかった。この現象が表れる時は脳波トポグラフから視角野と前頭葉が活発になりそれらの場所の電位が瞬間的に上昇し、2ヶ所の場所の活動が接がっていることが観測された。特に前頭葉では右脳側の活動が高くなった時に生理が大きく変化することがわかった。

また、能力者が手を触れないで物体を移動するという実験を生理測定により計測を行った。透視と同様に、能力を発揮すると血中酸素濃度が減少し、その直前で首における血流が増加するのは同様であった。能力を発揮している時間は手、足の温度が減少した。能力を発揮した瞬間の時間に、呼吸状態が変化していた。GSR 中に見られる振動現象はこの実験でも確かめられた。この振動周波数は 1.4Hz で脳波的には δ 波の領域であった。

脳波トポグラフィで調べると、筋電のような脳波が時々見られ、可

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

能性のある場所では短時間ではあるが δ 波が強く現れた。この δ 波は左前頭部と側頭野の中間で発生し、それが左後頭部まで活動範囲が広がった。この δ 波の活動電位が最も高い所で物体が移動したと考えられる。この活動領域は透視が右脳であったのに比べて逆であった。またこの薬を移動するときの活動電位は、通常の電位に比べて大きな電位であった。